

■ モーツァルト『魔笛』より

「このオペラを拝見して思ったのは男の方のイマジネーションの魅力です。

それにしても**魔笛**という題名はどうもじっくりこなかったです。英語でマジック・フルートですから、直訳すると魔法の笛。魔笛だとまるで悪魔の笛という誤解をしていましたので、**序曲**の厳かな始まりとイメージが違いすぎていて、ずいぶん当惑いたしました。こういうのもファンファーレっていうそうです。オリンピックの開会式のとはずいぶん違いますね。(笑)それが3回鳴ります。この3は**フリーメーソン**が好んで使う数字で、このオペラではフリーメーソンの儀式や試練の始まりを告げるシーンで使われます。心が引き締められ、清められるようです。そして、この今日の調もEフラット。フラット3つ、ここでも3です。そうそう、フリーメーソンについて調べました。「会員相互の特性と人格の向上をはかり、よき人々をさらに良くする」秘密結社だそうです。この秘密結社という呼び名から、テレビなどでは面白おかしく扱われていますが、私が調べた限りではモーツァルトやハイドンもそのメンバーだったそうで、決して危険な団体ではないように思われます。事実、入会条件は「キリスト教に限らず、仏教でも、イスラム教でも良いから、真摯な信仰心が必要」と書かれていました。序曲の速い部分は軽快で、この歌劇の展開の速さとハッピーエンドを暗示しているようです。映画『アマデウス』でモーツァルトがヒューッって叫びながら曲を作っていたシーンが印象的です。この映画がどこまで事実在即しているかはわかりませんが、それは私にとってどうでもよいことです。それは、このシーンがモーツァルトの音楽が当時としては最先端で、常人のイマジネーションにはとても及ばないものであるというメッセージだとすれば、と

■ ワグナー『ニーベルングの指環』より

「それで、ああ、この方とは無理だなと思いましたの。

ワグナーの楽劇は**ライトモチーフ**と呼ばれる短いフレーズでできていて、その1つ1つに意味があるのは知っていますわ。指環や剣などのモノ、登場人物などのヒトを表すだけでなく、“生成”“契約”“愛”などの抽象的イメージまで。だからこれを知っていれば歌詞がわからなくても、歌の意味や背後にある心理描写もわかるのですが、そのつなぎ目が粗いとそれはまるで中学の時にいやいややらされたパッチワークを思いださせますの。

でもうなずけるものだからです。イマジネーションといえばこの歌劇で活躍する男性2人は素晴らしイマジネーションの持ち主として描かれています。

まずはパパゲーノ。『**私は鳥刺し**』は自己紹介とまだ見ぬ恋人を想像して歌うモノローグ。日本の狂言でよく見られますが、歌劇で最初に登場人物が自己紹介するのは少ない気がしますどうですか。詳しい方がいらっしゃったら教えてください。

私もそうですが、王子タミーノの歌う『**美しい絵姿**』の歌いだしの6度の跳躍に魅了される女性は数えきれないと思います。まだお見合いの経験はありませんが、写真を見て好きになられるってどんな気分でしょう。私は悪い気はいたしません。

その好きになられたパミーナは夜の女王の娘ですが、この歌劇では父親はわからずじまいです。これは私のまったくの当てずっぽうですが、神官ザラストロではないでしょうかザラストロはこの歌劇の中で、あのように気性の激しい女性のもとにパミーナを置いておくのはよくないと考え、自分のもとに連れてきたと言っていますが、これはおそらく父性愛によるものだと思います。この歌劇の始まりでタミーノは大蛇に襲われたところを夜の女王たちに助けられますが、これは絶対女の策略だと思います。私も巳年ですが、蛇と女は執念深いのです。(笑)だから『**夜の女王のアリア**』では、自分の娘パミーナに「憎きザラストロを殺せ」と命じるわけです。どうですかこの仮説。

最後の『**パ・パ・パ**』は赤い糸を信じる私にとって、ちょっと恥ずかしいけどうらやましい曲です。

愛の力を信じて自らの努力で本当の幸せをつかむ。『魔笛』はそんな2組のカップルの歌劇です。」

それと、ワグナーは女が幸せになるのが許せないのかもって思うことがありますの。エヴァ(マイスタージンガー)だって、歌合戦の賞品にされて、好きな騎士が優勝してくれたからよかったものの…。エルザ(ローエン格林)、ゼンタ(さまよえるオランダ人)、エリーザベト(タンホイザー)もみんな男の方の犠牲になっていますし、イゾルデ(トリスタンとイゾルデ)だって本当に死を望んだのかしら。女は現実主義なのです。その意味では『ニーベルングの指環』のヒロイン、ブリュンヒルデも愛に翻

弄された悲しい女のひとりかもしれませんわ。

これはニーベルング族という地下に住む小人族が手に入れた世界を支配できる黄金の指環の話です。その代償は愛を断念し呪うこと。これを巡り、ラインの川底から黄金を奪ったニーベルングの小人、指環の呪いで殺し合いをしてしまう巨人の兄弟、優柔不断な長ヴォータン率いる神々の戦いで始まり、権力闘争の末の神々の衰退で終わる。楽劇『ニーベルングの指輪』はそんな物語なのです。

その序夜『ラインの黄金』に続く**第1夜『ワルクューレ』**は若者が戦いに傷つき逃れてきた嵐の場面を表す**前奏曲**で始まります。

若者はヴォータンが人間に生ませたもので自分をヴェーバルトと呼んでいました。たどり着いた先は宿敵フンディングの館。春の訪れのようにさわやかな愛を感じる**ジークムントとジークリンデ**運命的の出会いの場面です。介抱するフンディングの妻ジークリンデと旅人は互いに引かれ合いつつ、その夜、生い立ちを話すうち兄妹であることを知ります。ジークリンデは旅人に名前をジークムント（勝利を守る者）と名乗るよう勧め、それに応えてジークムントは木に刺さった剣を引き抜き二人は手に手をとって逃亡します。剣の名前は苦悩を意味するノートゥング。神々長ヴォータンがわが息子のために用意した、つまりジークムントしか抜くことができないものです。木に刺さった剣は、フンディングと妻の夫婦関係の象徴でもあります。だから剣を引抜いたジークムントは、双子の妹の今の婚姻関係を断ち切り、自分の妻とする「ノートゥング」（苦難）を自ら選んだ、高らかな愛の宣言なのです。

『ワルクューレの騎行』はとても有名な曲なのでご存じでしょ。**ワルクューレ**とは戦死者を選ぶ乙女たちで、戦いの勝ち負けが神により決められると考えられていた時代の北欧神話に由来しているそうですわ。ワルクューレたちが戦場の岩山で、戦い敗れた英雄の屍を片付け、自分のお気に入りの男たちの死体を物色し取り合ったり、自分の乗ってきた馬たちが戦場の殺気に興奮して喧嘩する様子を笑ったりしている曲です。

そこに遅れてやってきたワルクューレの長女ブリュンヒルデは、父ヴォータンから義理の兄弟ジークムントを殺すことを命じられていましたが、ジークムントとジークリンデ2人の愛の強さに心を打たれ命に背いたことを告白します。

ブリュンヒルデはヴァルハラに逃げ込みますが、そこへ現れたヴォータンにジークリンデは双子の兄の子供

を身ごもっていることを告げ、胎内の子をジークフリートと名付けるのです。ここからが**ヴォータンの告別**のシーンです。ヴォータンは娘への怒りと愛との葛藤の中、ブリュンヒルデの潤んだ瞳を閉じ、まぶたに口づけして神力を奪って永遠の別れを告げます。そして槍で岩を突いて火の神ローゲを呼び出し彼女を守るようにと炎を燃え上らさせます。その炎は恐れを知らない英雄だけが越えられるもの。彼女は、眠り姫のように、誰であれ最初に目を覚まさせた男のものとなると告げるのです。

時は経ち、双子の兄妹の子供ジークフリートは成長し、運命の導きなのか燃える岩山でブリュンヒルデを見つけます。ブリュンヒルデの美しさに魅せられジークフリートはプリンス・チャーミングのように、唇を重ねるとブリュンヒルデは目覚めます。そして2人は運命の力に導かれたかのように強く愛し合い、声を合わせて愛の歓喜を歌い上げるのです。そんな第2夜『ジークフリート』以降は、ジークフリートとブリュンヒルデの話になります。

この2人の愛の夜明けから**第3夜『神々の黄昏』**は始まります。ジークフリートは「支配の指環」をブリュンヒルデに愛の証として預け新たな冒険を求めてライン川に向けて旅立ちます。これが「**ジークフリートのラインへの旅**」です。

しかしそののち、陰謀で“忘れ薬”を飲まされたジークフリートは、ブリュンヒルデと愛を誓ったことも忘れ、彼女から力づくで指環を奪います。宿敵のいる城での酒宴で、ジークフリートは自らの過去を語るうちにブリュンヒルデとの出会いを思い出し、一同に明かしてしまいます。ジークフリートに過去を思い出されては困る宿敵ハーゲンも、その背中に槍を突き立て、瀕死のジークフリートは、ブリュンヒルデの目覚めを回想して息絶えます。そして**ジークフリートの葬送**のシーンになるのです。

ラインの乙女たちからすべてを聞かされたブリュンヒルデは、ジークフリートの指から指環を取り、自ら炎に飛び込みます。するとライン川が大氾濫し、ブリュンヒルデの亡き骸も、指環も、宿敵ハーゲンも、川底に吸い込まれてしまいます。「ブリュンヒルデの自己犠牲」です。ラインの乙女たちに指環は戻り、一方天上でも神々の住むヴァルハラからも火の手が上がり、神々の時代は終焉を迎えます。

「愛」を捨て権力と財宝に目がくらみ衰退した小人、巨人、神々に対し、「愛」を信じ貫いた人間を描いた楽劇『ニーベルングの指環』は「愛」の力を讃えた物語です。」